ぽけっとすとーりー　～小さな国の、小さな小さな物語～

　――次の日。

　太陽が元気に顔を出し、ウトウトしながら窓際で日向ぼっこをしていた雅也。教室には、まだ人は少ない。昨日帰った後、道場にいる、残りの三人に説教されたが故か、雅也はちょっと憂鬱だった。

　すると、そんな気分を吹っ飛ばすかのような声が、教室中に響く。

「よぅ、雅也。おはよう！」

　いつもなら教室で神楽を待っている時間だが、今日は違う。いや、今日『から』違う。

「やぁ、太一。おはよう」

　元気な声だが、ちょっと不貞腐れたような顔を見るに、どうやら太一も昨日、帰ってから叱られたようだ。声と顔のギャップが可笑しくて、雅也はつい、プッと笑ってしまった。

「あぁん？　何笑ってんだてめぇ？」

　口から出る言葉は、完全に不良のソレである。教室にいる子が、思わずビクッと体を強ばらせた。

「ごめんごめん。でも、随分怒られたっぽいね」

「おっ、分かるか？　いやぁ、昨日は散々だったぜ。体を紐でグルグル巻にされてよ、三十分も逆さ吊りにされちまった。で、その後は押し入れに一時間も閉じ込められ……」

　自分で言ってゲンナリしたのか、太一はウヘェっというような顔をする。

「あー……僕も、拓馬達にすごく叱られた。囲まれて怒られたのなんて、初めてだったよ」

「拓馬達？」

　誰だソイツ、と言わんばかりの声を出す太一。

「あぁ。同じ道場で修行している、僕の家族かな。一人は、お手伝いさんみたいな人だけど」

「そいつら、つえーのか？」

　修行という単語を聞いて、太一が目を光らせる。雅也は何となく、太一の考えていることが分かった。

「……うち来る？」

　思わず首肯しかけた太一だが、途中で固まった。大方、雅也達の修行の邪魔になると思ったのだろう。それに、と思い、太一は首を横に振る。

　実は太一も、来週から自分の祖父に稽古をつけてもらえることになった。但し、この一週間で、昨日の反省が行動に現れていたら、という条件でだ。ついうっかり口走ってしまった『もう二度と、見知らぬ他人に喧嘩売ったりしません』が予想以上に祖父に効いたらしい。ここで、道場破りじみた真似は、太一には出来なかった。

　これに関しては、本格的な稽古が始まってからでも遅くないと、彼は思う。

「言っておくけど、今うちに来ても、道場破りにはならなからね？」

　だが、どうやら友人は、その考えを見透かしていたらしい。とはいえ、その言葉には、太一はどこか挑発めいたものを感じた。

「あぁん？」

　すると雅也は、ニンマリと笑う。

「だって、最初に出てくる僕が、太一を倒しちゃうから」

「おぅ……言ってくれんじゃねーか。難なら、試してみるか？」

　釣られてニンマリと笑う太一。

「いいねぇ。じゃあ、今日の放課後、うちに来なよ。ルールは、二対二のシングルバトルでどう？」

「バカ言え。二対四で充分だっつーの！　開幕『破壊光線』で蹴散らしてやらぁ」

　いつしか二人は、昨日の憂鬱は何処へやら、楽しそうに笑っていた。

「あぁ、そうだ雅也。てめぇ聞いたかよ？」

「ん？　あぁ、キリンリキのこと？　昨日、病院から電話来たよ！　助かったって！」

「いやー……あれ聞いた時、おれぁ力抜けちまってよ……ホント良かったぜ……」

「……そうだね。太一の応急処置が、良かったみたいだね？」

「……いや、お前等がいなけりゃ、応急処置も出来なかったよ。お前等のお陰でも、あるんだぜ？」

「……そうだね。僕達二人で、助けたんだ」